ジュール・ヴェルヌ〈驚異の旅〉再発見
『ハテラス船長の航海と冒険』刊行記念ワークショップ

荒原邦博

本ワークショップは、2021 年 6 月 30 日に拙訳でヴェルヌの『ハテラス船長の航海と冒険』がインスクリプトより刊行されたのを記念して、開催されたものである。同社は 2017 年からヴェルヌの小説シリーズ〈驚異の旅〉の新訳コレクション全 5 巻を刊行中で、本作は当コレクションの第 1 巻(第 4 回配本)となる。新訳シリーズ監修者の石橋正孝氏(立教大学)をはじめ、全 5 巻の翻訳を担当している 4 名がパネリストとして登壇した。

新訳コレクションは主に 2 つの狙いを持っている。一つは、ヴェルヌ作品の研究的な批評校訂版を作成することである。明治期以来、青少年向けの SF 冒険小説とされてきたヴェルヌ作品には、日本語で校訂版と呼べるテキストが存在しないため、その長年の欠落を埋める必要がある。そしてもう一つの狙いは、『80 日間世界一周』や『海底二万里』のような超有名作品とは異なる、知られざるヴェルヌの傑作を日本語で読めるようにし、それによって通常は大衆作家とみなされるヴェルヌが、実際には純文学作家も青ざめる実験的な小説をいくつも書いていたことを示して、日本の読書界におけるヴェルヌのイメージを刷新することにある。

本イベントは総合文化研究所の「翻訳を考える」シリーズの一環として企画されたものであることから、新訳コレクションの翻訳者がそれぞれの担当巻での体験をもとに、ヴェルヌ作品の翻訳上の問題について多様な角度から縦横無尽に論じる大変興味深い内容となった。オンライン開催となったワークショップには常時 110 名前後のアクセスがあり、非常に盛況であった。

発表は最初に荒原が、ヴェルヌと本新訳コレクションの紹介を行った上で、『ハテラス船長の航海と冒険』を翻訳する際に問題となった点、および同作品のあまり注目されていない興味深い点について報告した。後者に関しては、ハテラス Hatteras という名前が英語の「帽子屋のように気が狂った mad as a hatter」に由来しており、その意味でほぼ同時期に執筆・刊行されたルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』と類縁性が見られることを指摘した。翻訳に関しては、まず科学分野の語彙を取り上げ、現在との分類の違いやヴェルヌ自身による英語からフランス語への誤訳が日本語に翻訳する上でさらなる困難を招くこと、次に、ハテラスの忠犬 Duk という固有名詞が、英語やデンマーク語の発音、またそれが物語上で果たす様々な機能から、日本語でのカタカナ標記を著しく難しくすること、そのため最終的に「ドゥック」という名前が与えられた理由を説明した。

二番目の発表者である石橋氏は、監修者としての幅広い知見と子供の頃から長年に渡りヴェルヌ作品を読んできた体験に裏打ちされた、ヴェルヌ翻訳における誤訳の問題を面白

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

い事例を挙げながら分析した。ヴェルヌ作品の翻訳には二つのタイプの誤訳がある。一方の「圧縮型」は、作品の細部を読み飛ばし、ストーリーを一気に追う読書経験が生み出す誤訳で、例えば『月を回って』（コレクション第 2 巻に収録）の最後にあるドミノゲームの用語を「白人でいっぱいだ」とする誤訳は、訳者が物語の（西欧中心主義的な）筋に過剰に適応してしまったがゆえに生じる。もう一方の「忠実型」は、文章の細部にこだわることによって起こる誤訳で、『海底二万里』においてバイロンやポーが「泳ぎの達人」であるところを、maître の多義性にとらわれて（作家の）「先輩」としてしまうことに見られる。だが、この二つのタイプは味わい深い誤訳である。なぜなら、ヴェルヌ自身がこの両極の間を揺れながら作品を執筆していたからであるという指摘は、翻訳を二次創作と捉え、それを作家本人による創作それ自体とつなぐ見事なもので、聴衆を唸らせるに十分であった。

三番目の発表者である三枝大修氏（成城大学）は、『蒸気で動く家』（コレクション第 4 巻、荒原との共訳）の持つ教育力について論じた。ヴェルヌの作品の多くはエッツェル社の人気雑誌『教育娯楽雑誌』に掲載されていたことからも分かるように、その地理学的な記述によって、西欧の読者に地球上のあらゆる地域の地理と歴史について「教育」する目的があった。小説の舞台であるインド、ウッタルプラデーシュ州におけるモンスーンの嵐が惹き起こした現代の事故の話を皮切りに、『蒸気で動く家』の印象的な雷雨の描写を紹介し、ヴェルヌの文章が読者の興味をかきたてながら、しかも正確な情報を伝えており、小説の魅力が現代でも有効なその地理学的特徴にあることが、説得力のある形で示された。

最後に日本ジュール・ヴェルヌ研究会の創設者でもある新島進氏（慶應大学）が、「独身者機械」（ミシェル・カルージュ）の観点から担当巻である『カルパチアの城／ヴィルヘルム・シュトーリッツの秘密』（コレクション第 5 巻）と『ハテラス船長の航海と冒険』をつないで論じた。ヴェルヌの小説連作〈驚異の旅〉は、〈狂気の旅〉にほかならない。空虚な欲望への幼児的な固執、おそらくは死によってしか解決されない欲望が、テクノロジーの力で推進力を得て、物語／テキストを生む。それがヴェルヌの描き出す世界であり、『カルパチアの城』の歌姫ラ・スティラの音響映像再生装置を体験するゴルツ男爵は、ボーカロイドを欲望する今日の我々の体験の起源に位置している。こうした指摘は新島氏の十八番だが、アイドル論隆盛の昨今、この議論に改めて惹きつけられた聴衆も少なくなかったはずである。今回の発表では、そうしたヴェルヌ的人形愛が『ハテラス船長の航海と冒険』の極点を目指す犬の旅と同じ構造を持っており、また「狂」という字の「へん」は犬を、また「つくり」は王としてのハテラスを示すがゆえに、作中の「犬船長」こそがヴェルヌ的「狂気」の最も純度の高い形象であるという新展開を見せており、日本語・フランス語の違いを超えて、ヴェルヌ世界の重要な本質を提示するものとなっていた。

イベントをおよそ半年後にこうして振り返ってみると、自分のものはさておき、素晴らしい発表の数々に溜息が出るほどで、企画者冥利に尽きる。三枝氏が発表の後半で『蒸気で動く家』での翻訳の仕方について触れていたが、本コレクションでは訳文が完成するまでに、とりあえず訳者としてクレジットされている各人が作り上げた文章に、監修者とさらには編集者の丸山哲郎氏の手が入っており、そうした意味で、エッツェルによるかなりの介入をつねに許してきたヴェルヌ作品に相応しい、まさに「集団的アレンジメント」（ドゥルーズ＝ガタリ）の効果として翻訳が実践されていることも付言しておこう。

そもそも、日本で最初にフランス語から翻訳された文学こそがヴェルヌの『80 日間世界一周』（川島忠之助訳）であり、そうしたこともあって英語やロシア語からの重訳を含む、明治期の翻訳をめぐる問題が集中して現れているのがヴェルヌというトポスである。『ハテラス船長の航海と冒険』は、明治期に外大ロシア語学科出身の外務官僚であった福田直彦によってロシア語から重訳されたのが最初であり、総合文化研究所の「翻訳を考える」シリーズでは今後、今回のワークショップを受けて、翻訳という観点から明治期のヴェルヌが持っていた世界文学としての全体像を掘り起こす作業につなげていきたい。

2021 年 7 月 16 日
総合文化研究所およびインスクリプトによる共催
場所 :Zoom ウェビナーでのオンライン開催
パネリスト：新島進（慶應義塾大学）
　　石橋正孝（立教大学）
　　三枝大修（成城大学）
パネリスト・司会 : 荒原邦博（東京外国語大学）

LES VOYAGES EXTRAORDINAIRES

シリーズ【翻訳を考える】

《ヴェルヌ〈驚異の旅〉再発見》
『ハテラス船長の航海と冒険』
刊行記念ワークショップ

パネリスト

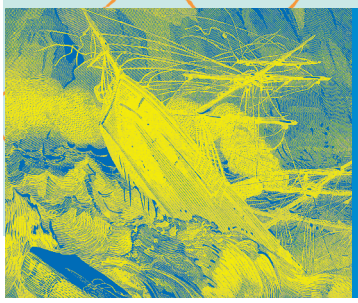
新島進
（慶應義塾大学）

石橋正孝
（立教大学）

三枝大修
（成城大学）

荒原邦博
（東京外国語大学）（司会）

『ハテラス船長の航海と冒険』
荒原邦博訳
装幀：間村俊一　カバー装画：堀江栞



7 月 16 日（金）18 時～ 20 時　オンライン

参加費無料　事前登録制

以下の URL・QR コードからお申し込みください。

https://bit.ly/2UXKhYw

共催：インスクリプト、東京外国語大学総合文化研究所